

『こどもまんなかアクション』リレーシンポジウム in 栃木市 が開催されました。



こどもや子育てにやさしい社会づくりを推進するために、『こどもまんなかアクション』リレーシンポジウム in 栃木市』が令和 6 年 3 月 12 日(火)に開催されました。「こども誰でも通園制度と子育ての質」をテーマに基調講演とパネルディスカッションが行われたほか、栃木市の大川市長が市のマスコットキャラクター・とち介と「こどもまんなか応援サポーター」就任を宣言。場所を移して午後からは、「定期的な預かりモデル事業」利用者とのグループディスカッションが実施されました。

■基調講演・パネルディスカッション

「こどもまんなか社会とこども誰でも通園の考え方」と題して、こども家庭庁保育政策課長補佐が「こども誰でも通園制度」の目的や意義を PR。昨年 12 月に閣議決定された「こども未来戦略」で、「全ての子育て家庭を対象とした保育の拡充」を目的に創設するとしている「こども誰でも通園制度」は、「保護者の就労要件を問わず月一定時間まで利用できる通園給付」であり、「給付対象は 0 歳 6 ヶ月～2 歳」「全国の自治体で実施」「予約等の総合支援システムの導入」などの情報も紹介。現在は令和 8 年度の本格実施に向けて、栃木市をはじめとした全国で「モデル事業」が行われ、今後、こども誰でも通園制度(仮称)の本格実施を見据えた試行的事業が実施されることなどを報告「補助基準上一人当たり「月 10 時間」を上限」とすることについては、試行的事業の実施状況も踏まえ検討をしていくことなども伝えられました。

大川市長からは、現在市内の認定こども園でモデル事業が行われていること、来年には市内 10 か所ですべて試行的事業に取り組むこと、育児に関わる行政機能などをまとめた「こども家庭センター」の設置などが報告されました。また自身の子育てを振り返りながら通園することの重要性に言及。こどもたちは集団行動から社会的な学びを得られること、保護者は社会との接点を失い孤立感を深めてしまうリスクの解消につながることを伝え、社会全体で子育て世帯を支える機運の高まる現状をさらに推し進めていくことに意欲を見せました。

その後のパネルディスカッションでは、コーディネーターとして司会を務めた(株)こころくの山下真実氏から「こども誰でも通園制度ができた時代の流れや必然性を感じます」との意見を受けて、こども家庭庁保育政策課長補佐は自身の経験を踏まえて「こどもが家庭ではできない経験を得ることができるきっかけになることや、親子が集まる場に行くことで『同じ思いの人がいる』とわかるようになった」とコメント。大川市長も、かつてはこどもを預けられる親族や知人が近くにいた環境を挙げ、「行政や民間などの『社会全体』で、代わりになるものを作っていかなければならない時代が来た」と語りました。シンポジウムの最後には栃木市のマスコットキャラクターのとち介が登場し、大川市長とともに「こどもまんなか応援サポーター」就任を宣言。参加したこどもたちとともに記念撮影が行われました。



こども誰でも通園制度の紹介を行う
こども家庭庁保育政策課長補佐



大川市長は「社会で子育て世帯を支える時代になった」と語りました



ベンチャー企業の立ち上げなど
子育て支援に深く携わってきた山下氏



「こどもまんなか応援サポーター」
がさらに増えました

■グループディスカッション



同日午後からは「定期的な預かりモデル事業」が実施されている、認定こども園さくら内の子育て支援センター「ゆめふうせん」で、モデル事業の利用者のみなさまとこども家庭庁とのグループディスカッションが開催されました。モデル事業の利用頻度や知ったきっかけ、利用にあたって感じたことや利用後の感想など、様々な利用者の生の声が寄せられました。

【概要】名称:『こどもまんなかアクション』リレーシンポジウム in 栃木市 / 場所:市役所本庁舎1階市民スペース / 日程:令和 6 年 3 月 12 日(火) / 内容:《基調講演》こども家庭庁保育政策課長補佐「こどもまんなか社会とこども誰でも通園の考え方」 栃木市長・大川秀子「未就園児を支える地域の在り方・考え方」《パネルディスカッション》「こども誰でも通園制度と子育ての質」《こどもまんなか応援サポーター就任宣言》大川市長・とち介 / 主催:栃木市 / 後援:こども家庭庁